

ISHIKAWAみらいアート展トークイベント
「障害者アートのこれから—美大生の視点から—」

10月28日（土）13時～16時 於：金沢美術工芸大学3号館101講義室

【タイムテーブル】

13：00	ごあいさつ／趣旨説明	渋谷 拓（金沢美術工芸大学教授）
13：05 ～13：50	基調講演「障害者アート～埼玉県とみぬま福祉会工房集の取り組みから」 宮本恵美氏（みぬま福祉会（埼玉県）、アートセンター集センター長）	
14：00 ～14：50	ラウンドテーブル「障害者アートのこれから—美大生の視点から」 【登壇者】キュレーション担当学生3名、宮本恵美氏、渋谷拓	
15：00 ～15：30	「『障害者アート』について今思うこと」	渋谷 拓
15：30 ～16：00	情報交換会（自由な質疑応答）	

「『障害者アート』について今思うこと」
—美術大学の学芸員課程教員の視点から— *

渋谷 拓

（学生指導・本展キュレーション／金沢美術工芸大学教授）

令和5年10月28日（土）15時15分～15時45分
於：金沢美術工芸大学3号館101講義室

渋谷 | 最後に僭越ながら、私の方から少しお話をしたいと思っています。少し急ぎながらお話しします。

改めまして、この美大の教員の渋谷と申します。よろしくお願ひします。今日はとても散文的なんですけれど、「『障害者アート』について今思うこと—美術大学の学芸員課程の教員の視点から—」ということでお話ししたいな、と思います。発表の内容は、簡単に自己紹介と、学芸員時代の障害者アート関連の仕事をお話しして、今、美術大学で私は、美術館とか博物館で働くために必要な資格である学芸員資格があってその資格課程の教員なんですけれど、その教員として「障害者アート」というものについて学生に伝えていること、ひいては今思うことを最後にお話ししたいな、と思います。ちなみに今日、キュレ

* 本テキストは口頭発表を簡易整文したものです。

ーションということで担当してくださった3人と、あとデザインをしてくれている学生がここにいらっしゃるんですけど、4人とも博物館学芸員課程を履修してくれている学生です。

私は美術館の元学芸員なんですけれど、埼玉県立近代美術館で11年間学芸員をしておりました。今、美大では一般教育と言っていわゆる教養課程の教員になっていて、その中で担当が先程申し上げた通り博物館学芸員課程です。専門は博物館のことを教えるということと、元々やっていたのはフランスの美術史なんですね、実は。先程こちらでお話いただいている宮本さんとは、この埼玉県の時代にすれ違ったり、ちょっとご一緒したり、ということがあったということです。宮本さんの話にもよく出てきましたけれども、アール・ブリュット・コレクションというのがスイスのローザンヌにあるんですが、実は私はローザンヌに留学していたんです。フランスの美術の古いところをやっていたので、アール・ブリュットが目当てで行っていたわけじゃないんですけど、そこでやっぱり美術館があるから見てたんですよ。それで埼玉県立近代美術館で、じゃあこの分野の展覧会やりましょう、っていった時に渋谷さんやってください、ということが私にとってはきっかけだった、っていうことがあります。

どんな展覧会をやったのかっていうと、2011年に「アール・ブリュット・ジャポネ」展っていうのをやったんですね。もちろん「アール・ブリュット」っていうのは、フランスのジャン・デュビュッフエが提唱したものなんですけれど、「ジャポネ」だから、その日本のものを滋賀県とか日本財団とかが頑張って、ローザンヌとパリで展覧会をやって、それを日本に凱旋させるっていう展覧会を、じゃあ日本バージョンに仕立て直して展覧会を日本で回しましょうっていった時に、どこが最初になるのか？ということになって、それが埼玉であり、主にそれを担当したのが僕だった、ということがあります。これが僕にとっては埼玉県立近代美術館で、アール・ブリュットとは言っていますけれども、障害者アートの分野の仕事に携わった最初でした。日本では「アール・ブリュット＝障害者アート」みたいな認識が成り立っているんですけど、本来違うと言えば違って、それが同じとみなされているのは、ある意味日本の特徴ではある、というところなんですけれども。ちょっとそういったところは、一旦お話ししないで進みたいと思います。海外に持って行った日本の障害者アートは1000点ぐらい？800点ぐらいあるんですけど、さらに厳選した600点ぐらいだったかな？を展示したなかには、みぬま福祉会に所属されている齋藤裕一さんの作品も入っていたということがあります。

次に文化庁の仕事で「すごいぞ、これは！」展というのを同僚と二人で担当したんですけども、僕はどちらかとサブ担当の扱いでした。それでも自分でも作家を選んでキュレーターとして展覧会に参加する、ということをしました。2014年度に全国調査をして、その成果を2015年度に展覧会で紹介しました。先程宮本さんが「埼玉近美で展示することは、作家とか周りの支援者の方、福祉施設の方にとっても晴れの舞台だ」って仰っておられましたが、展覧会っていうのは、やっぱりそういった作家にとっても周りの人にとっても大事な機会だということなので、それがひいては障害を持っている方たちのエンパワーメントに通じる、ってことなわけです。それを国としてやりましょう、ということに埼玉県として応募して、この展覧会になった、ってことですね。12人のキュレーターが、自分

が「これはすごい」って思う作家を推薦するっていうタイプの展覧会でした。大きく言うと、この2つの展覧会に私はメインもしくはサブみたいな形で携わって、必ずしもこの分野の専門家じゃないけれども経験を積んできた、という経緯があります。「アール・ブリュット・ジャポネ」展というのは、今回「ISHIKAWAみらいアート展」が第23回全国障害者芸術・文化祭の石川大会なわけだけでも、それが2011年の時には埼玉県であり、第11回の埼玉大会だった、位置づけとしてはそういったものだった、ということです。「すごいぞ、これは！」っていうのは、文化庁のすごく漢字ばかりの名称の「戦略的芸術文化創造推進事業」って事業の中の、「障害者の優れた芸術活動に関する研究」っていうことの中で、文化庁からお金をもらってやったという仕事です。これが埼玉時代の障害者アートに関連する私の仕事です。今、学芸員っていういろんな仕事するんです。展覧会だけではなく、自分の専門以外のこともたくさんやるんですね。私にとっては「障害者アート」っていうのは、埼玉県での仕事を通して経験を積んでひとつのレパトリーみたいな感じになっていた、というところがあります。

美大の教員として2019年から私は金沢に来ているんですけども、先程からもお伝えしている通り、私は美術館学芸員の実務経験を活かして博物館学芸員課程を持つということなんですけれども、他方でそれまで大学で教鞭を取ったことがなかったんですね。大学で教えていた経験があればなおよし、ってことだったんですけど、その時に何に直面したかということ、博物館学のいろんな科目、概論だったり博物館の経営だったり展示の仕方、考え方だったり、資料の保存の仕方が云々、ってたくさん教えないといけないんだけど、これは私にとってすごく大変だけれどもとてもいい機会でした。実務経験を改めて振り返って言語化する、いわば教えられるようにしないといけない、ということで、その中で自分のやってきた仕事を面白がりつつも強制的に振り返る機会になったということです。私は美大で美術館での実務経験を噛み砕いていろんな形で学生に伝える、って事をするわけなんですけれども、私は2つの展覧会を担当してきたわけですよ、「アール・ブリュット・ジャポネ」展とか「すごいぞ、これは！」展とかを。教員として博物館のことを学芸員になりたい人に教えていくにあたっては、この2つの展覧会の経験はとても大事で、とても重要なことだと思って割合話題に採り上げています。展示論という中では、どちらかということこの分野が美術館での展示のテーマとして入ってくるのはそう昔からあることはなくて、老舗の美術館とかありますけれど、多くの美術館にとって新しい分野だということを紹介します。一方で、ご存知の方もいらっしゃると思うんですけど、美術館とか博物館とかっていうのは、基本的には教育基本法の下、社会教育法の下に博物館法が位置づけられていて、どんなに楽しくても博物館・美術館の活動って常に社会教育だっていう側面があります。だからエンターテインメントじゃないんですよ、基本的には。楽しくても。じゃあ博物館学を教える時にひとつ大事になってくるのは、活動の社会的な意味ってことになってきます。社会的な意味とか内容が問われてくるわけで、そういったことを博物館教育論で伝えるときには「社会的包摂」っていうことを、改めて教えるわけです。そういったことを教えていく中で、障害者アートの分野の展覧会を美術館もしくは博物館でやるって事の意味とかを改めて伝えていく、っていうことになります。

昨年度と今年度、県の方から委託を受けて美大として展覧会やったんですけども、昨年度は「プレ展」という位置づけで「イン・ユア・リズム」という展覧会にしました。昨

年度は、言ってしまうと予算も多くて、より自由度が高かった。他方で今年度に関しては、文化祭全体の中のひとつなので、昨年度のように行かなかつたんですけども、学生の皆さんには、できるところとなかなかできないところ、そこの辺りを十分ご理解いただいてそれでも参加して下さった、ということでもとても感謝しています。昨年度よりも限られたリソースと自由度の中で展覧会をやりました。ちょっと昨年度の話をする、「イン・ユア・リズム」には、昨年の学生と話してタイトルを作ったんですけど、「作品の作り手も作品を鑑賞する人もそれぞれが自分らしいリズムを持っていて、それを互いに尊重したい」って意図を込めています。例えば、さっきから「アール・ブリュット」とか、もしくは今日のテーマである「障害者アート」とか、いろいろ言葉がありますよね、「アウトサイダー・アート」とか、「エイブル・アート」とか、「ポコラート」とか、今回の文化祭でいえば「みらいアート」という言葉が出てきているわけだけれど、まあ今までの経験を通して、僕としてはある特定の分野に対して「何々アート」というような名付けることをやめたい、って思うようになりました。それが昨年度の展覧会のタイトルにもなったわけですけど、これはこういうアートですよ、って言うことを言っているわけじゃないんですよ。例えばですけど、他の言葉をちょっと見てみましょう。「アール・ブリュット」というのは「生(き)の芸術」って訳されたりするんです。元々フランス語です。今、厚生労働省なんかもこの言葉を使い始めているんですけど、その中で専門の美術教育を受けてない人が制作する優れた芸術とか言うんですけど、これはそれなりに一見なるほど、って思うけれど、じゃあ障害がある人に美術教育を拒否しているのか、って言うような側面がある定義なんですよ。これは後でまたお話ししますが、だから「アール・ブリュット」という言葉がどうなんだろう？ってことが今あります。「アウトサイダー・アート」というのは、「アール・ブリュット」という言葉が英語圏に入った時の英訳なんですけれども、そのままの英訳じゃないんですよ。ニュアンスがちょっと違ってきている。「アウトサイダー」ってことは、「アウトサイド」に対して「インサイド」があるって事なわけですよ。これは常に「アウトサイダー・アート」って名のるや、常にアウトサイドにいないといけない、みたいな、もしくは制度化された「インサイド」ってものを常に前提としないといけないみたいな話なので、これもどうなんだろう？というところはちょっとあります。今回石川県で我々がやっている「みらいアート」展って言うのは、もうこれは昨年度かな？のうちにタイトルが決まっているので、「イン・ユア・リズム」の時みたいに名前をどうこうする、ってことは我々には選択の余地がなかったんですけども、これは未来志向でいきましょう、というニュアンスが込められてるんだろうなと思いますけれど、まあこれはある意味で、専門的でもなければ行政的でもない言葉なんだろうなと思います。他方で「障害者アート」というのは、半分以上行政的な用語でもあるかな、と思います。すごくリアルな話をする、この言葉があるおかげで行政の方は予算措置しやすい、ということもあるのかなと思っています。

それで「イン・ユア・リズム」と「すごいぞ、これは！」と似たところは何なのかっていうと、「すごいぞ、これは！」って言うのは、これはキュレーター側の態度なんですよ。いわば「驚き」です。「すごいぞ、これは！」のなかには、「選ぶ人」と「選ばれる人」みたいな一種の上下関係とか評価が含まれているかな、と今から振り返ると思います。ある意味では「すごいぞ、これは！」って言うのは、とても斬新な展覧会のタイトルだったんですけど、しかも「名づけ」をさっき僕が回避したいと言った、ある分野のアートを

名づける、ってことを回避もしているから、ひとつのすごいアイデアであったんだけど、他方でこういった側面があったかなと思います。それで昨年度学生と話す中で、展覧会のタイトルとして「何々アート」っていうのかどうか、ってことも議論したんですけど、やっぱりそうはしなくて、「イン・ユア・リズム」は「君のリズムで」ぐらいの意味なわけですけども、同じこと、同じ人間であるって事を肯定しつつ、でも能動的な意味でも違うよね、「同じこと」と「違うこと」を同時に肯定する、っていうようなタイトルに相談の中でなったかなと思っています。それはある意味では、対等な立場での「共感」というキュレーター側の態度であって「評価」するってことではないのかな、というふうに思います。「すごいぞ、これは！」に関して言うと、企画側としてはそれなりに意図があったわけですね。「何々アート」って呼称するのをやめたいわけです。「すごいぞ、これは！」で選ぶ側が学芸員の責任を明らかにするっていうのは、それは当時の文脈であって、誰がどういった経緯で選んだかわからないで展示されている、っていうのは、この分野で当時あったんですね、10年ぐらい前は。それを私の同僚が、そういうんじゃないで、学芸員の責任を明らかにしたい、ということで学芸員側の「驚き」を出していったと。当時はそれでひとつのアイデアであり、展覧会ができたんだけど、他方で振り返ってみると、ここにはやっぱり「選ぶ一選ばれる」という関係性やニュアンスが如実に出ているタイトルでもあるかな…と思った次第です。

この「すごいぞ、これは！」っていうタイトルに対しては、当時、福祉関係者の方から、全員ではなくてやっぱりいろんな声があるので、その中で指摘があったんですけど、実は障害を持つ人たちが作るモノに関して、簡単に「すごい」って言っちゃいけないんじゃないの？っていう指摘がありました。なぜなら、「すごい」という言葉を発すると「障害を持っている人＝芸術に秀でた人」という先入観が構成されちゃう、でもそれは違うんじゃないの？ってことを言いたいですよね、その指摘をされた方は。私が美大に来て思いますけれど、別に美大に入ったからすごいわけでもなく、美大生が作るからすごいわけでもないですよね。それは例えば、法学部に入って法学やったからといって全員が優れた法学者なのか、っていったら全然そうならないじゃないですか。美大に入って美大の人が作っていると全部すごいのか、っていうと必ずしもそうじゃないのと一緒に、障害がある人が作ったからといって、おそらく別にすごくないものもある、ということなんですよね。福祉関係者の人が言いたかったのは、同時に「別にすごくない」と言えるフラットな関係があるべきなんだけれど、必ずしもそういう雰囲気じゃない、っていうことが、当時はひとつ課題として指摘されたことなのかな、と思います。全てがすごければ全てがすごくなる、っていうのか、とても難しい問題なんですけれど、「すごい」っていうことに、「評価する」ということに対する一部の方の指摘が、なんだか僕の中ではずっと解決しないまま、魚の骨が喉の奥に引っかかってずっととれない、みたいなイメージがあって、まあ今でも思っていることですね。

美大の教員になって、授業のタイミングと展覧会が開催されるタイミングがなかなか合わないことも多いけれども、そういう機会が金沢周辺で開催される場合には見に行ってお報告書きなさい、というようなことをして、なるべく学生にはこの分野、アール・ブリュットなり障害者アートなり、っていう分野を見せるようにしているのが今の私のスタンスです。じゃあ、そういったレポートでどういったリアクションが返ってくるのかって

うと、作品自体で面白いのに「障害者アート」って言葉なんかもういらんんじゃないの？っていう学生が結構います。美大生っていうのは、あんまり外のレッテルに惑わされずに、面白いものは面白いと思えるんですね。ある意味、美術大学だからこそその感性なのかなと思って、僕はそこはとて信頼しているし、期待しているところがあるんですね。こんなに面白いのに、「障害者アート」って言葉があるせいで逆になんだか色眼鏡で見えてしまう、というようなことを言う学生はとて多い。そこはとて大事だなと思っています。将来的には「障害者アート」って言葉がなくなるべきだと思いますから。他方で、でも何故「障害者アート」って言葉で一旦は括られないといけないのか、その必要があるのかってことまでは、授業で展覧会を見てもらう、そしてレポート書いてきてもらってまたそれに対するリアクションをする、というなかでは、なかなか伝えるにくいところもあって。それに関しては、こういった分野に関心がある学生に、この今回のみらいアート展の展示を作っていくみたいな機会に、こういった事情も実はあってね、ということでもなるべく伝えていきたいと思っています。「障害者アート」っていうのが、ある意味行政用語でそれによってお金が付きやすい、という現実が他方であるわけですね。それもあわせて教えていくべきなのかな、ということが、私が今思っていることですね。「障害者アート」って言葉は必要ないんじゃないの、って、確かに作品が面白ければそれに基づいて言葉を紡いだり、展示したり、紹介したり、ということはできるんだけど、ある意味でそれはとて純粹に芸術学的な次元に留まっていて、一方では、社会の中でこういったことが行われているというところが、もう少し理解が及んでくれればなと思っています。

服部正さんはこの分野の第一人者で、行政とかが頑張る以前から、兵庫県のほうでこの分野を90年代からずっとやっていらっしゃる方で、私も「すごいぞ、これは！」でご一緒したんですけども、昨年度こんなふうに言っています。読み上げます。「日本の美術館の学芸員のこの分野の全般的な関心の低さというものも大きな問題ではないかなと思っています。学芸員になる人の大半は、美術史や美学芸術学を大学や大学院で学んでいます。しかし、そのような学科、学部で芸術と福祉の関係とか、共生社会における芸術の役割などを学べる機会はほとんどありません。学芸員養成課程の必修科目の中にも共生社会の実現に向けて博物館が果たすべき役割を学ぶための科目はありません。芸術を評価する役割になっていく若い人たちに対して、共生社会における芸術の意味とか役割を考える機会を充実させていく、ここも急務ではないかなと思っています**」。引用を終わります。

それで、これに関してはあんまり明示的に言っている人がいないかな？とか、ある意味僕独自の視点なのかもしれないんですけど、それにもしかしたらちょっと上から目線に見えるかもしれないけれど、ご容赦ください。私はそもそもフランス美術史を専門にしてきました。今の世の中の「アート」とか「芸術」って考え方は、やっぱり西洋に由来して、西洋から輸入したものをベースに世の中が動いていると思います。じゃあ、その西洋のアートってはどういったものだったのかっていうと、まあ中世ぐらいまでは職人仕事であっ

** 文化庁「第5回障害者文化芸術活動推進有識者会議」（令和4年9月12日）での発言。
文化庁HP掲載の同議事録を参照（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/shogaisha_yushiki/05/pdf/93780301_01.pdf）。

て、必ずしも社会的ステータスは高くなかったわけですよ。それよりも、文学っていうか、詩というか、文法とか修辞学とか、もしくは数学とか幾何学とか、そういった学問の方が社会的ステータスがずっと高かったわけです。でもルネサンス以降、それこそラファエロとかミケランジェロとかレオナルドが出てくる頃に、アートの社会的ステータスがグーッと上がって来ますよ。その時どうしたのかっていうと、その時はもうすでに高い權威がある詩学とか修辞学とか数学とかから論理を導入してアートはすごいんだぞ、知的な活動なんですよ、って社会的地位を上げてきたわけです。今、21世紀にいる我々は、アートといえば場合によっては高いお金が払われて購入され、もしくはアーティストが尊敬される、というような社会に生きているわけですが、中世のヨーロッパとは違って、21世紀の日本もしくは世界でアートは高い社会的ステータスを誇るようになったわけですよ。だからこそ、アートとかキュレーションの仕事を希望する人が増加しているわけです。今、とても美術館の学芸員っていう仕事はとても人気があって、でも競争率が高く、という状況にあるんですけれども、そういった中でも、やっぱりこの分野に関心を持つ美術館学芸員はそう多くはないんですよ。その理由の一つが、例えば「アール・ブリュット」っていうのが、もうそれは美術史の教科書に出てくるんだけど、そこからの認識以上のことに考え方が及んでいかなるところがあるのかなと思います。今、社会的包摂の次元を備えたアートというのがあって、そこに関与していく、関心を持つということよりも、やっぱり旧来的な美術史的な知識の中での「アール・ブリュット」、ジャン・デュビュッフエが提唱しました、って以上のところになかなか関心が向いていかない、というのが一方であるのかなと思っています。でも、かつて中世まではあまり社会的地位が高くなかったわけだけども、既に高い權威を持っている他の分野の論理を導入して、どんどん自分の地位を上げていったっていうのがアートです。じゃあ、今度は高い地位を得たアートが福祉分野の方にアートの權威をどんどん利用してもらおうターンに来ているんじゃないの？っていうのが、すごく大局的に見た時に、最近僕は気づいたっていうか思い始めていることで、それは美術館の学芸員していた時にはあまり思っていなかったことなんです。美術館での仕事を反省して、それを改めて学生に伝えるために咀嚼する中で、こういった考えに行き着いてきたというところがあります。だから、美術館の学芸員というのは、何年にこういった流れが起きました、っていう美術史的な知識を持っているだけではなくって、大局的に見た時にアートが今どういう地位にあってどういうふうな方向に行かないといけないのか、ってことを少し高い視点で見る必要があるのかな、と思って。私は美術史の教員ではないんですけれども、でも美術館の学芸員をやってきて、そして西洋の美術史をやってきて、今はそうしたことを伝えたいな、と思っている次第です。

服部さんが「芸術を評価する社会になっていく若い人たちに対して、共生社会の芸術の意味とか役割を考える充実させていく必要がある」と仰っておられました。私は服部さんのような専門家ではなく、多少の経験を備えただけの人間ではあるんですけれども、その中でできること、やらないといけないなと思っているのは、美術館学芸員時代に障害者アートの分野の仕事をした教員として、障害者アートっていうものに授業でなるべく触れて、それを少しでも学生に伝えていくことかな、と思っています。頭でっかちではなくて、体感でアートを理解している美大生にこそ、いろんな期待をしていきたいと思っています。

はい、長くなっちゃったんですけど、これが今皆さんに私の立場で考えていて、伝えたいなと思ったことです。抽象的な部分もありましたけれども、以上で発表を終わります。ありがとうございました。

〈了〉